

検討種の取り扱いについて

I. 日本鳥類目録改訂第5版で除外された種および亜種の検討について

池長裕史・川上和人・柳澤紀夫
(目録編集委員会・記録グループ)

はじめに

日本鳥類目録改訂第5版(1974年)(以下、5版という)英語版にはAPPENDIX2. (pp. 363-364)として「Species and Subspecies of Uncertain Records: 森岡弘之氏編集」(日本語版では「日本鳥類目録改訂第5版から除いた種および亜種について」pp. 118-120)に27種および亜種が掲載されている。

これら27種および亜種は、日本鳥類目録改訂第4版(1958年)(以下、4版という)以降に日本国内の記録として三島(1968)等に記載されながら、5版への掲載が見送られたものである。

なお、4版では、戦前の日本の領土に基づく日本鳥類目録改訂第3版(1942年)を引き継いで、一部極東の種および亜種の名称が掲載されているが、一方で施政権が返還されていなかった小笠原と沖縄の記録は除外されている。

日本鳥類目録改訂第6版(2000年)(以下、6版という)では、これら27種および亜種のうち、5種および亜種については正式に掲載され、3種は外来種としてAPPENDIX Aに、3種は検討中の種および亜種としてAPPENDIX Bに掲載されている。残りの16種および亜種のうち、スズメ目掲載種の5亜種についてはAPPENDIX C(以下、6Ap-Cという)に森岡弘之氏による解説があるが、全体として5版で「除外した」以外の検討の経緯は明らかでない。5版では、「除外」の理由として、1. 標本または写真による証拠がない、2. 写真はあっても不鮮明で確実な同定ができない、3. 似た種が多く、写真による同定は困難である、4. 標本はあっても、亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない、5. 外国産の飼鳥が不慮に逃げ出したものと推察される、が挙げられているが、それぞれの種および亜種が具体的にどの理由に基づいて除外されたかは示されておらず、また、6版APPENDIX Bの検討のカテゴリー、1. 同定可能な写真または標本がない、2. 2亜種以上がある種で、亜種を同定できない、またはかなり高い確度で推定できない、3. 同定に疑問がある、4. 自然分布とするには疑問がある、5. 論文として公表さ

れていない、との間で必ずしも整合性が図られていない。

日本鳥類目録改訂第7版(以下、7版という)を編集するにあたり、過去の目録にこのような形で掲載されている種および亜種について、個別に検討を行い、整理しておくべきと考え、以下にその結果を記した。

なお、6版でも検討種となっている3種については、「II. 日本鳥類目録第6版で『検討中』とされた種および亜種の検討について」で記録の整理をしているので参照されたい。

(1) 記録のカテゴリーについて

6版に掲載されていない種および亜種を7版で掲載するにあたり、その取り扱いについてはカテゴリーを設けるべきとの日本鳥学会鳥類目録検討委員会の報告(川路ら2008)を踏まえ、目録編集委員会として整理した。

カテゴリー A: 目録本文への掲載 (亜種未判定を含む)

判定基準: 論文または引用可能な写真あるいは参照可能な標本があること。

A1: 鳥学会誌等の査読論文として発表されている場合は、基本的に掲載する(ただし、論文自体に自然分布を疑う主張がある場合は、当委員会が判断する)。

A2: 十分に識別できる引用可能な写真を掲載した刊行書籍等がある場合、または、参照可能な標本がある場合は、それらに基づき当委員会で判断する。

A3: 種および亜種の区分について分類上の検討が必要な場合は、分類グループの対応を踏まえ、当委員会で判断する。[検討上のサブカテゴリーであり、検討状況によってはカテゴリー Dとなることもある]

カテゴリー B: 外来種

判定基準: 継続的に記録がある種および亜種のうち、その記録が人為的導入に由来することが明らかなもの。

B1: 自然環境下で繁殖記録のある種を掲載する。この場合、持続的繁殖か一時的繁殖かは問わな

い。記録の取り扱いについてはAに準ずる。

B2: 確実な自然繁殖記録がない種のうち、観察事例が多く繁殖の可能性が高い種については当委員会判断する(コリンウズラ等)。

B3: 飼育環境から当該個体のみの逸出と判断される場合。[検討上のサブカテゴリーであり、最終的に7版には掲載しない(フラミンゴ類等)]

B4: 野生化している家禽も掲載する。生息状況としてはB1に該当するが、日本に導入された時点で野生個体ではなかった種についてはその旨を記述する(アヒル、バリケン、ニワトリ、ドバト等)。

カテゴリー C: 自然分布要検討種

判定基準: A1 および A2 に基づき、種および亜種の同定は妥当と判断されたもののうち、移動性が知られていない、本来の分布域から余りにも離れている等、必ずしも自然分布と断定できない場合は本カテゴリーとし、引き続き検討対象とする。

カテゴリー D: 記録要検討種

判定基準: 種および亜種の記録情報があるものの、上記A~Cのいずれに該当するか不明のため、引き続き調査が必要とされるものについては本カテゴリーとし、現時点での検討結果を記載する。

D1: 記録(年月日、場所、記録者)は明らかであるが、引用できる写真、標本がない等により客観的に立証できない場合。識別の難易にかかわらず、観察事例のみの報告事例。識別可能と思われる写真等が存在していても私蔵状況にある場合、あるいは不安定なインターネット上の「公表」に止まっている場合等。自然分布であるかどうかの検討を問わない。

D2: 情報不足。

D2-1: 当該種および亜種の可能性のある個体の記録(年月日、場所、記録者)は明らかで、標本または写真が現存するが、識別が難しい等、現時点では種および亜種名の確定ができない場合(亜種不明であっても種の同定が確実であればAとする)。

D2-2: 検討時点では、記録(年月日、場所、記録者)自体が不明瞭であり、引き続き調査が必要であると判断された場合。

D3: 当委員会の検討によって誤認・誤報である、またはその可能性が高いと判断されたもの。[検討上のサブカテゴリーであり、最終的に7版には掲載しない]

カテゴリー E: 古記録種

判定基準: 日本において最近50年以内の記録がない種および亜種については本カテゴリーとし、記録の変遷がわかるよう整理する。国内絶滅種や、日本での確認記録の途絶えた渡り鳥や迷行種が該当し、6版掲載種および亜種についても適用する。

(2) 日本鳥類目録第5版で除外された種および亜種の具体的検討について

1. ミナミオナガミズナギドリ *Puffinus bulleri*
6版に本掲載済み。

2. コウミツバメ *Halocyptena microsoma*

5版で検討された記録: トカラ列島東方100キロの海上(1968年8月6日)(出典: 週刊世界動物百科127号, 1973年)。

本種はカリフォルニア湾内とバハカリフォルニア西岸に分布するとされる単形種である(del Hoyo *et al.* 1992)。

出典(内田1973b)によると、内田康夫、片岡義広両氏により観察されており「全身黒色、尾はくさび型(じゅうぶん長い点から換羽中ではない)、ヒメクロウミツバメ(同時に観察)よりやや小、アナドリ(同じく)の約半分」であったため本種と判定したことが記述されているが、「写真がなく、観察者がふたりという点で説得力が弱い」とも記述されている。くさび型の尾を持つウミツバメ類は本種以外に該当する種はないが、「標本または写真による証拠がない」と判断されたものと考えられる。本記録以外に、その後の記録はないと思われる。

対応: D1 と判断する。

3. ナンヨウヒメウ *Phalacrocorax melanoleucus*
5版で検討された記録: 伊豆諸島八丈島(1955年5月11日)(出典: 鳥獣集報16巻1号64ページ, 1957年)。

本種はインドネシア東部からニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドに分布し、3亜種あるとされている(del Hoyo *et al.* 1992)。

出典(藤本1957)の記述では「此の種は筆者の観察と写真にもとづいて黒田長久博士に御鑑定を依頼し、本種であらうと云ふ御返事をいただいた。なおこの種は日本領土より始めて(ママ)の観察記録である。分布は熱帯太平洋の島嶼に産し、北はパラウ群島に分布する。観察

11. V. 1955. 八丈島底土海岸1羽」とあり、岩礁の上の1羽の写真(モノクロ)が掲載されている。「写真はあっても不鮮明で確実な同定ができない」と判断されたものと考えられる。

掲載写真では頸と体下面は白いが、頭部全体が頭巾をかぶったように黒いこと、胸に黒いパッチがあることから、ナンヨウヒメウとは考えられず、カワウまたはウミウの幼鳥と識別すべきと思われることから、これまで日本でのナンヨウヒメウの記録はないと判断する。

対応：D3と判断する。

4. ナンキンオシ *Nettapus coromandelianus*

5版で検討された記録：南部琉球与那国島(1972年3月22日)(出典：週刊世界動物百科70号, 1972年)。

本記録は、出典(内田1972)のほか島田(1973)にも記述されており、波多野泰夫、今井光雄、小沢重雄の三氏によって祖納湿地において雌1羽が観察されたものである。その後、今井(1976)により詳しく報告され、スケッチが示されている。森岡ら(1978)では「標本・写真などの裏付け資料がないので採用しない」とし、5版の補遺の検討において「確認できない記録」と判断されている。

本種は台湾でも迷鳥として複数回記録されており(方2008)、沖縄県で記録される可能性はある。近隣の亜種分布状況(del Hoyo *et al.* 1992)から想定される亜種は基亜種であろう。

なお、2010年6月に大阪市および沖縄県多良間島でそれぞれ雄1羽が観察・撮影されている(佐竹ら2011, 羽地ら2011)。

対応：その後の記録の学術論文発表によりA1と判断する。

5. オオケワタガモ *Somateria mollissima*

5版で検討された記録：北海道根室落石湾(1971年2月28日)(出典：野鳥36巻7号27ページ, 1971年)。

出典(三間ら1971)によれば、三間久豊、波多野泰夫、今井光雄、小沢重雄の各氏により雌1羽が観察され、ケワタガモとの相違点が記述されているが写真撮影はされておらず、「標本または写真による証拠がない」と判断されたものと考えられる。

本種は北シベリア沿岸やアリューシャン列島にも分布しており、北海道から本州北部沿岸で

記録される可能性は否定できない。本記録の後に1986年2月に北海道ノサップ岬での雌1羽の観察記録(高田1991)があるが、写真の有無を含め記録以外の記述がなく、追認ができない。近隣の亜種分布状況(del Hoyo *et al.* 1992)から、日本での記録が想定される亜種は *S. m. v-nigra* であろう。なお、山階(1986)は本種の和名をホンケワタガモとしているが、英名との関係で妥当と思われる。当委員会としては、今後この和名を用いることとする。

対応：D1と判断する。

6. シロガシラトビ *Haliastur indus*

5版で検討された記録：北九州市門司区(1963年, 1970年1月3日)(出典：小林桂助, 原色日本鳥類図録[「原色日本鳥類図鑑」の誤植であろう]-保育社, 1972年), 東京都多摩川是政(1974年1月未発表)。

出典(小林1972)には「それぞれ1羽ずつ捕獲されたことがあるが、おそらく飼いが逃げたものであろう」として「再検討を要するので今回は種名をとどめるのみにしておく」とされているが、同図鑑の他の版には種名を含めて記述されていない。

本記録以降では、1983年5月に沖縄県宮古島(平良市; 現宮古島市)で「カゴ抜け」として記録されている(宮古野鳥の会2000)。この記録の扱いについては、飼育事例を確認したものではなく、宮古群島内の伊良部島佐良浜で遠洋漁業に従事する船員たちがしばしば海外から持ち込んだカツオドリやオウム等を飼育していたことから、本記録も同様に飼われていた本種個体が逃げ出した可能性があるとの推察による(久貝勝盛 私信)。本種は東南アジアに広く分布し、おもに海岸地域で観察される(del Hoyo *et al.* 1994)。季節的な渡りをする種ではないが、台湾でも迷鳥として記録されている(方2008)。そのため、宮古島で記録された個体は自然分布の可能性もある。ただし、宮古野鳥の会(2000)には写真が掲載されておらず、識別の確認ができない。なお、東南アジアに複数の亜種が分布しているとされており(del Hoyo *et al.* 1994)、亜種の断定は困難と思われる。

対応：D1と判断する。

7. ヒメハイロチュウヒ *Circus pygargus*

5版で検討された記録：宮城県伊豆沼（1967年3月4日）（出典：野鳥32巻8号15ページ，1967年）。

出典（柳沢1967）によれば，雄成鳥1羽が観察され，本種の特徴とされる次列風切の黒帯を確認したとのことであるが，写真撮影されていない。観察者は柳澤紀夫，由井正敏両氏のみとのことである（柳澤紀夫私信）。「標本または写真による証拠がない」と判断されたものと考えられる。本記録以外に，その後の記録はないと思われる。

本種はヨーロッパから中央アジアまで繁殖分布する単形種であるが，長距離の渡りをする（del Hoyo *et al.* 1994）ことから，日本でも記録される可能性は否定できない。

対応：D1と判断する。

8. キョクアジサシ *Sterna paradisaea*

5版で検討された記録：千葉県浦安（1967年4月24日）（出典：野鳥32巻7号27ページ，1967年）。

出典（宇山1967）には観察記録が詳細に記述されているが写真撮影されておらず，「標本または写真による証拠がない」と判断されたものと考えられる。本種については6版でも検討種となったが，その後の記録について佐々木ら（2004）の論文発表がある。

対応：6版でも検討種であり，その後の記録の学術論文発表によりA1と判断する。

9. オニカッコウ *Eudynamis scolopacea*

5版で検討された記録：南部琉球西表島（1970年10月8日）（出典：野鳥36巻1号25ページ，1971年）。

出典（黒田1971a）によると，西表島で黒田長久氏により1970年10月8日から14日にかけて，それらしい声と姿が観察されたとされており，繁殖まで示唆されているが，黒色の雄個体は観察されておらず，また，記録を裏付ける標本や写真，録音はなかったことから，「標本または写真による証拠がない」と判断されたものと考えられる。なお，同記録は黒田（1971b）にも記述されている。

2005年4～6月に宇山大樹氏らによって沖縄県与那国島にて複数個体が観察された記録があり（宇山2005，森河・森河2008），雌雄の写真

も公表されている（宇山2011）。さらに，愛知県岡崎市（2005年6月；杉山2006），鹿児島県薩摩川内市（2006年5月），鹿児島県南さつま市（2006年7月）等で記録され，小園・所崎（2007）にとりまとめられているほか，山形県飛鳥（2007年5月；日本野鳥の会山形県支部2007）で雌個体と思われる観察例があり，2011年6月には熊本県熊本市で雌個体が保護後落鳥している（坂梨仁彦私信）。

対応：その後の記録の学術論文発表によりA1と判断する。

10. シベリアツメナガセキレイ *Motacilla flava plexa*

5版で検討された記録：男女群島（1970年5月3日）（出典：男女群島鳥類調査報告書29ページ—北九州野鳥の会，1971年）。

5版の脚注で，本記録は観察と写真のみであることから亜種として断定できないことが記述されている。「写真はあっても不鮮明で確実な同定ができない」，または「似た種が多く，写真による同定は困難である」と判断されたものと考えられる。写真から本亜種と認定できない理由は明らかでないが，本亜種を他の亜種のシノニムとはしていない。

本亜種はツメナガセキレイの亜種のうち，白い眉斑が明瞭なマミジロツメナガセキレイと眉斑のないキタツメナガセキレイの中間的な表現型の個体群であるが，Dickinson（2003）およびdel Hoyo *et al.*（2004）において*Motacilla flava*の1亜種として認められている。本記録の後に琉球列島や対馬等で観察，撮影され，特徴の明瞭な写真が公表されている（沖縄野鳥研究会2002，五百沢ら2004）。

なお，Clements（2007）は，*Motacilla flava*と*M. tschutschensis*（英名Eastern Yellow Wagtail）とを分離し，本亜種およびマミジロツメナガセキレイを後者の亜種としている。

対応：公刊図書等での発表によりA2と判断する。

11. キタツメナガセキレイ *M. f. macronyx*

6版に本掲載済み。

12. タイワンハクセキレイ *M. alba ocularis*

6版に本掲載済み。

13. コセジロタヒバリ *Anthus gustavi menzbieri*
5版で検討された記録：南部琉球石垣島（1927年2月15日）（出典：山階鳥類研究所報告30号94ページ，1968年）。

5版の脚注で，本記録について，同亜種は南ウスリーの限られた個体群であり，基産地で採集された標本（基産地はハンカ湖）との比較なしには亜種の断定はできないとしている。「標本はあっても，亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。出典（三島1968）の標本は引き続き森林総合研究所に現存しており（Kawaji *et al.* 2003），標本の亜種の同定を確認する必要がある。なお，本記録以外に，その後の本亜種の記録は確認されておらず，記録から50年以上経過している。対応：亜種が再確認されたとしてもEとなるが，当面D2（A3）と判断する。

14. カラアカモズ *Lanius cristatus cristatus*

5版で検討された記録：青森県尻屋崎（1938年5月8日），伊豆諸島鳥島（1955年1月），福岡県沖島（1963年5月25日）（出典：山階鳥類研究所報告30号94ページ，1968年）。

アカモズの基亜種であり，シベリア中東部から北モンゴル，バイカル湖を経てサハリン北部からカムチャツカに至る地域で繁殖し，インド中南部からスリランカ，バングラデシュ，ミャンマーの沿岸地域からマレー半島で越冬する（del Hoyo *et al.* 2008）。

5版の脚注で，本亜種について，上記の記録に加え，硫黄列島（北硫黄島）の記録があることを示した上で，カムチャツカや東シベリアの個体群との比較なしには亜種の断定はできないとしている。「標本はあっても，亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。

北硫黄島の記録については，4版に「Volcano Is. (San Alessandro)」とあり，当時は施政権のなかった小笠原諸島の記録が参考掲載されていた。北硫黄島の個体および出典（三島1968）に示されている標本のうち，伊豆鳥島と福岡県沖の島灯台の個体と考えられる標本は山階鳥類研究所に所蔵されており（それぞれ標本番号YIO-26157，YIO-26156およびYIO-26154），また，青森県尻屋崎産の標本は森林総合研究所に現存している（Kawaji *et al.* 2003）。

これらの記録の他に，石川県舳倉島，長崎県

対馬等で本亜種と思われる観察事例があり，写真が五百沢ら（2000）に掲載されている。

しかしながら，アカモズの亜種間の交雑事例や中間タイプの存在も報告されており（石塚1990，Yamashina 1939），現時点では本種の亜種（アカモズ，カラアカモズおよびウスアカモズ *L. c. confusus*）については，観察記録（写真）のみでの断定は難しいかもしれない。

対応：D2（A3）と判断する。

15. カラフトミソサザイ *Troglodytes troglodytes dauricus*

5版で検討された記録：新潟県佐渡郡加茂村河内（1953年1月5日）（出典：野鳥新潟4号4ページ，1964年），鳥根県浜田港馬島（1938年12月）（出典：鳥78号21ページ，1961年—チョウセンミソサザイ [=カラフトミソサザイ] として報告）。

6Ap-Cでは，本種の亜種ではダイトウミソサザイ *T. t. orii* のみが記述されている。新潟の記録については，出典（佐藤1964）には標本に基づき三島冬嗣氏によって同定されたことが示されているが，同定の経緯および標本の所在については示されていない。鳥根県の記録は5版以降本掲載されているマリアナヨシゴイ *Ixobrychus sinensis bryani* と同様の出典（三島1961）であり，標本は森林総合研究所に現存している（Kawaji *et al.* 2003）。5版の森岡氏による英文本文脚注に「I am unable to confirm it」とあり，「標本はあっても，亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。

また，亜種チョウセンミソサザイ *T. t. peninsulae* は *T. t. dauricus* のシノニムとされているが，沖縄県久米島の属島，奥武島で *T. t. peninsulae* とされる個体が1998年12月に観察，1999年2月に捕獲・標識されており，さらに2000年11月23日に観察されている（嵩原ら2001，沖縄野鳥研究会2002）。

なお，Dickinson（2003），del Hoyo *et al.*（2005）およびClements（2007）では，いずれも亜種 *peninsulae* は掲載されておらず *dauricus* を認めているが，前2者では *dauricus* の分布域に対馬を含めている。

対応：D2（A3）と判断する。

16. シベリアセンニュウ *Locustella certhiola minor*
6版に本掲載済み。
17. ヤチセンニュウ *Locustella naevia mongolia*
5版で検討された記録：南千島クナシリ島（1963年6月4日）（出典：V. A. Nechaev, Birds of the Southern Kuriles, 171 ページ, 1969年）、シコタン島（1948年8月24日）（出典：A. I. Gizenko, Birds of Sakhalin, 282 ページ, 1955年）。
本記録については、誤同定に基づく記録であったことが報告されている（日本産鳥類記録委員会 2005）。
対応：D3 と判断する。
18. ミヤマビタキ *Muscicapa ferruginea*
5版で検討された記録：男女群島（1971年5月）（出典：週刊世界動物百科 120号, 1973年）。
本種は台湾の山岳地に留鳥として分布している一方、中国西南部の個体群は東南アジアに渡りを行うことが知られているが単形種とされている（del Hoyo *et al.* 2006）。検討の対象となった男女群島の記録（内田 1973a）は写真撮影されており（高野ら 1981）、種の同定は可能と考えられることから、「外国産の飼鳥が不慮に逃げ出したものと推察される」と判断されたものであろう。
その後、沖縄県与那国島（2回）と鹿児島県トカラ列島平島（3回）の記録がある（日本産鳥類記録委員会 2004）ほか、山口県見島（2004年5月；武下 2005, 2010年5月；見島観光協会バードウォッチング係 2010）、愛知県名古屋市（2007年5月；西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会 2008）、沖縄県沖縄本島（2008年3月；沖縄野鳥研究会 2010）、沖縄県宮古島（2008年10月；沖縄野鳥研究会 2010）等の各地で記録されている。琉球列島や日本海側の離島等で渡りの時期に観察されており、五百沢ら（2000）等にも写真掲載されている。これらは自然分布の個体とするのが妥当と考えられる。
なお、本種の和名は5版ではミヤマビタキとなっているが、ほかの版では一貫してミヤマヒタキを採用している（日本産鳥類記録委員会 2004）。
対応：6版でも検討種であり、公刊図書等での発表により A2 と判断する。
19. チョウセンオオルリ *Cyanoptila cyanomelana cumatilis*
5版で検討された記録：北海道（出典：C. Vaurie, Birds of the Palearctic Fauna, 第1巻 326 ページ, 1959年）。
5版の英文本文脚注および6Ap-Cにおいて、Vaurie の記録の詳細が不明とした上で、韓国産の *C. c. cumatilis* 標本と日本産の亜種 *C. c. cyanomelana* (Temminck 1829) 【5版脚注では基亜種 *C. c. cyanomelana*】との区別は難しいとしてシノニムである可能性が疑われている。「亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。
Dickinson (2003), del Hoyo *et al.* (2004) および Clements (2007) は、いずれもオオルリに *C. c. cyanomelana* と *C. c. cumatilis* の2亜種を認めており、茂田 (2003) による「確実な記録」の学術誌報告がある。
対応：その後の記録の学術論文発表により A1 と判断する。
20. キタシマアオジ *Emberiza aureola aureola*
5版で検討された記録：日本（迷鳥）（出典：C. Vaurie, Birds of the Palearctic Fauna, 第1巻 692 ページ, 1959年）。
5版の英文本文脚注および6Ap-C では Vaurie の記録について「日本および台湾に迷行する」とされていることを引用し、詳細不明としているのみである。「亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。
基亜種は日本で繁殖している亜種シマアオジ *E. a. ornata* に比べて前頭が褐色であり脇の斑も褐色味が強い。スカンジナビア半島北部からカムチャツカまで分布し、カムチャツカからオホーツク海沿岸の個体群は *E. a. ornata* との中間型を示す (Byers *et al.* 1995)。知られている分布域と渡りをする習性から、日本でも記録される可能性はあり、誤記録と確定できる情報もないが、標本の所在が不明で検討できず、その後の記録情報もないことから、除外することが妥当であろう。
対応：D3 (E) と判断する。
21. チョウセンオオジュリン *Emberiza schoeniclus pallidior*
5版で検討された記録：新潟県柏崎市（1956年2月28日, 1965年2月28日）（出典：野鳥 32

巻2号65ページ, 1967年).

出典(風間1967)では、「昭和40年2月28日悪田海岸で拾得」とあり、1956年の記録は5版日本語版の誤植であろう。同定の経緯について「山階鳥類研究所の吉井正先生を通じて、黒田長久理学博士に御同定頂いたところ、チョウセンオオジュリンの♀であると言う御返事が来た」とあり、風間(1968)にも同様の記述があるが、現時点で標本の存在については確認できない(山崎剛史私信)。5版の英文本文脚注では、本種の亜種の雌の冬羽での識別は確実にはできないとされており、「標本はあっても、亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられる。6Ap-Cでも、同定が不確実であるため認められていないとしている。

この亜種はシベリア南西部に分布し、亜種和名となっている朝鮮半島には通常分布してはいない(Byers *et al.* 1995)。知られている分布域と渡りをする習性から、日本でも記録される可能性はあり、誤記録と確定できる情報もないが、標本の所在が不明で検討できず、その後の記録情報もないことから、除外することが妥当であろう。

対応：D2と判断する。

22. サバンナシトド *Ammodramus sandwichensis*

5版で検討された記録：宮城県伊豆沼(1971年1月16日)(出典：野鳥37巻7号36ページ, 1972年)、茨城県涸沼(1971年3月14日)(出典：野鳥37巻7号37ページ, 1972年；週刊世界動物百科76号, 1972年)。

5版において掲載されなかった個別理由は不明であるが、「写真はあっても不鮮明で確実な同定ができない」、「似た種が多く、写真による同定は困難である」等の理由により亜種の同定を含めて確定できなかったものと推定される。

その後、各地で観察事例が増え、また標識調査で捕獲されたことから学術誌報告としても取りまとめられている(永田・石本2000, 山本2005)。

対応：6版でも検討種であり、その後の記録の学術論文発表によりA1と判断する。

23. チョウセンカワラヒワ *Carduelis sinica ussuriensis*

5版で検討された記録：鳥根県浜田(1941年3月5日)(出典：鳥78号21ページ, 1961年)。

カラフトミソサザイやマリアナヨシゴイと同出典(三島1961)であり、標本も同様に現存している(Kawaji *et al.* 2003)。「標本はあっても、亜種の同定を十分に行う資料がそろっていない」と判断されたものと考えられるが、5版脚注および6Ap-Cには記述がなく、検討の経緯は不明であり、標本の亜種の同定を確認する必要がある。

Dickinson(2003)およびClements(2007)では、本亜種は中国東北部、ウスリー地方および韓国に分布するとされていることから、日本で記録される可能性もあるが、本記録以外に、その後の本亜種の記録は確認されておらず、記録から50年以上経過している。

対応：D2(A3, E)と判断する。

24. ベニスズメ *Amandava amandava*

6版に外来種として掲載済み。

25. ブンチョウ *Padda oryzivora*

6版に外来種として掲載済み。

26. キンバラ *Lonchura malacca atricapilla*

5版ではギンバラ *Lonchura malacca* の亜種としているが、6版では独立種とされ、外来種キンバラ *Lonchura atricapilla* として掲載されている。

27. ホシムクドリ *Sturnus vulgaris*

6版に本掲載済み。

上記の各種の記録および文献の確認にあたり、各地域の鳥類記録取りまとめ担当の方から情報をいただいた。また、日本産鳥類記録委員会の梶田学委員長と亀谷辰朗副委員長から多大な情報提供と重要なコメントをいただいた。記して感謝の意を表する。

引用文献

- Byers C, Olsson U & Curson J (1995) *Buntings and Sparrows: A Guide to the Buntings and North American Sparrows*. Pica Press, Sussex.
- Clements JF (2007) *The Clements Checklist of Birds of the World. 6th ed.*, Cornell University Press, New York.
- del Hoyo J, Elliott A & Sargatal J (eds.) (1992) *Handbook of the birds of the world. Vol. 1. Ostrich to Ducks*. Lynx Edicions, Barcelona.

- del Hoyo J, Elliott A & Sargatal J (eds.) (1994) *Handbook of the birds of the world. Vol. 2. New World Vultures to Guineafowl*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds.) (2004) *Handbook of the birds of the world. Vol. 9. Cotingas to Pipits and Wagtails*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds.) (2005) *Handbook of the birds of the world. Vol. 10. Cuckoo-shrikes to Thrushes*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds.) (2006) *Handbook of the birds of the world. Vol. 11. Old World Flycatchers to Old World Warblers*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds.) (2008) *Handbook of the birds of the world. Vol. 13. Penduline-tits to Shrikes*. Lynx Edicions, Barcelona.
- Dickinson EC (ed.) (2003) *The Howard and Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 3rd ed.*, Christopher Helm, London.
- 藤本 勉 (1957) 八丈島の鳥について. 鳥獣集報 **16**(1): 57-66.
- 方 偉宏 (2008) 台湾鳥類全図鑑. 猫頭鷹出版社, 台北.
- 羽地邦雄・砂川栄喜・池長裕史 (2011) 沖縄県多良間島におけるナンキンオシ *Nettapus coromandelianus* の観察記録. 日鳥学誌 **60**: 246-249.
- 今井光雄 (1976) 与那国島にナンキンオシ. 野鳥 **41**(12): 35-36.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸 (2000) 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸 (2004) 日本の鳥 550 山野の鳥 増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 石塚 徹 (1990) 金沢市におけるアカモズの亜種間交雑例. Strix **9**: 71-75.
- Kawaji N, Tojo H, Matsuoka S, Takano H & Kitahara E (2003) Catalogue of bird skin collection in Forestry and Forest Products Research Institute (FFPRI). Bulletin of FFPRI **2**(4) (389): 271-350.
- 川路則友 (委員長)・池長裕史・梶田 学・金井 裕・西海 功・平岡 考 (2008) 鳥類目録検討委員会検討結果報告. 日鳥学誌 **57**: 175-180.
- 風間辰夫 (1967) 柏崎市付近に渡来した珍鳥について. 野鳥 **32**(2): 7-9.
- 風間辰夫 (1968) 新潟県柏崎附近の鳥類について. 山階鳥研報 **5**: 66-92.
- 小林桂助 (1972) 原色日本鳥類図鑑 増補改訂版 (12刷). 保育社, 大阪.
- 小園卓馬・所崎 聡 (2007) 九州におけるオニカッコウの観察初記録. Strix **25**: 201-204.
- 黒田長久 (1971a) 琉球の鳥類調査から 新記録の鳥オニカッコウ (西表) とカラムクドリ (石垣), 附, ヒメウズラシギ (石垣). 野鳥 **36**(1): 25-27.
- 黒田長久 (1971b) 琉球の秋の鳥類調査 (1970). 山階鳥研報 **6**: 54-79.
- 三間久豊・波多野泰夫・今井光雄・小沢重雄 (1971) 北海道で認めた珍鳥について. 野鳥 **36**(7): 27-28.
- 見島観光協会バードウォッチング係 (編) (2010) 2010 春 見島の鳥. 見島観光協会バードウォッチング係, 萩.
- 三島冬嗣 (1961) ミクロネシア, 朝鮮, 日本からの新記録の鳥. 鳥 **16**: 20-22.
- 三島冬嗣 (1968) 改訂 4 版日本鳥類目録以後の知見. 山階鳥研報 **5**: 93-101.
- 宮古野鳥の会 (2000) 宮古野鳥の会 25 周年記念誌. 宮古野鳥の会, 平良.
- 森河貴子・森河隆史 (2008) 与那国の野鳥を訪ねて. 個人出版.
- 森岡弘之・高野伸二・黒田長久 (1978) 日本産鳥類目録 (1974) 補遺 (第 2 回). 鳥 **27**: 113-117.
- 永田尚志・石本あゆみ (2000) 茨城県におけるサバンナシトド *Passerculus sandwichensis* の捕獲記録. 日鳥学誌 **49**: 55-58.
- 日本鳥学会 (1974) 日本鳥類目録 改訂第 5 版. 学習研究社, 東京.
- 日本鳥類目録編集委員会 (2000) 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本産鳥類記録委員会 (2004) 日本産鳥類記録リスト (4). 日鳥学誌 **53**: 110-119. [ミヤマヒタキ]
- 日本産鳥類記録委員会 (2005) 日本産鳥類記録リスト (6). 日鳥学誌 **54**: 110-122. [ヤチセンニユウ]
- 日本野鳥の会山形県支部 (2007) 山形県初記録の野鳥. やませみ (70): 11.
- 西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会 (2008) 愛知県内における鳥類の観察記録 2. 西三河野鳥の会研究年報 **11**: 44-47.
- 沖縄野鳥研究会 (編) (2002) 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.
- 沖縄野鳥研究会 (編) (2010) 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版, 那覇.
- 佐々木裕子・中野栄明・中根敏雄・小泉金次・二木 務 (2004) 静岡県富士川河口のキョウアジサシ. Strix **22**: 215-220.
- 佐竹忠義・湯浅 健・松井敬子 (2011) 大阪府深北緑地におけるナンキンオシ *Nettapus coromandelianus* の記録. 日鳥学誌 **60**: 254-256.
- 佐藤春雄 (1964) カラフトウグイスとカラフトミンサザイの渡りについて. 野鳥新瀉 (4): 4.
- 茂田良光 (2003) 日本からの亜種チョウセンオオルリ *Cyanoptila cyanomelana cumatilis* の確実な初記録. 山階鳥研報 **34**: 309-313.
- 島田 勉 (1973) 沖縄の与那国島にハイロガン. 野鳥 **38**(4): 46-49.
- 杉山時雄 (2006) 愛知県におけるオニカッコウの初記録. 西三河野鳥の会研究年報 **9**: 23-24.
- 高田 勝 (1991) 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要 (5): 1-19.
- 高野伸二 (1981) カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 高原建二・前原一統・嘉手苅初子・松田史郎 (2001) 久米島における最近の鳥類記録について. 久米島自然文化センター紀要 (1): 1-19.
- 武下雅文 (2005) 見島の初記録ミヤマヒタキ. 山口野鳥 (37): 3-4.
- 内田康夫 (1972) 日本迷鳥録 6 ナンキンオシ *Nettapus coromandelianus*. 世界動物百科 (70): 表 2.
- 内田康夫 (1973a) 日本迷鳥録 53 オジロビタキ *Muscicapa*

parva ミヤマビタキ *Muscicapa ferruginea*. 世界動物百科 (120): 表 2.
 内田康夫 (1973b) 日本迷鳥録 60 コウミツバメ *Halocyp-
 tera microsoma*. 世界動物百科 (127): 表 2.
 宇山大樹 (1967) キョクアジサシの観察. 野鳥 32(7):
 27–28.
 宇山大樹 (2005) 与那国島・春の鳥類Ⅳ 2005 年 3 月 10
 日～5 月 31 日の観察記録 概要版. Hobby's World, 東
 京.

宇山大樹 (2011) 野鳥の記録 与那国島 2002 年 3 月～2007
 年 1 月の 678 日間の観察記録. 文一総合出版, 東京.
 山本友紀 (2005) 北海道におけるサバンナシトドの初記
 録. Strix 23: 189–191.
 Yamashina Y (1939) Note on the Specimens of Manchurian
 Birds chiefly made by Mr. Hyojiro Orii in 1935. Tori 10:
 446–544.
 山階芳麿 (1986) 世界鳥類和名辞典. 大学書林, 東京.
 柳沢紀夫 (1967) 早春の伊豆沼二題. 野鳥 32(8): 14–15.

II. 日本鳥類目録第 6 版で「検討中」とされた種および亜種の検討について

池長裕史・川上和人・柳澤紀夫
 (目録編集委員会・記録グループ)

はじめに

日本鳥類目録改訂第 6 版 (以下, 6 版という)
 では, APPENDIX B に「検討中の種および亜種」
 として 34 種および亜種が掲載されており, それぞ
 れの種および亜種について受け入れなかった理由
 として以下の 5 カテゴリーが示されている.

1. 同定可能な写真または標本がない. この場
 合の「標本」には, 個人所有で, 他の研究者
 が調査を希望しても, それが不可能なような
 ものを含まない.
2. 2 亜種以上がある種で, 亜種を同定できな
 い, またはかなり高い確度で推定できない
 (例えば, 日本に渡来する可能性のある亜種が
 近隣地域に 2 亜種以上存在する).
3. 同定に疑問がある.
4. 自然分布とするには疑問がある.
5. 論文として公表されていない (鳥学ニュー
 ス No. 26 参照), または公表されたが最終原
 稿にまにあわなかった.

鳥学ニュース No. 26 には, 目録編集委員会とし
 て「論文」の対象誌は日本鳥学会誌, 山階鳥類研
 究所報告および Strix の 3 誌であり, 「各地の野鳥
 の会会報掲載の記録は採用しない方針」が示され
 ている.

日本鳥類目録改訂第 7 版 (以下, 7 版という)
 を編集するにあたり, 6 版での「検討中の種・亜
 種」について 6 版で整理されたカテゴリーに基づ
 き検討の経過を示し, 具体的対応を提起する.

なお, 日本鳥類目録改訂第 5 版の「日本鳥類目
 録改訂第 5 版から除いた種および亜種について」

とは異なり, 対象とされた 34 種および亜種の具
 体的記録については出典が示されていないため, 現
 委員会による調査の及ぶ範囲とした.

また, 7 版掲載のカテゴリーについては, 「検討
 種の取り扱いについて I. 日本鳥類目録改訂第
 5 版で除外された種および亜種の検討について」
 を参照されたい.

日本鳥類目録改訂第 6 版で「検討中」とされた種および亜種 (除外カテゴリー) の具体的検討について

種名の後の番号は 6 版に掲載されなかった理由
 のカテゴリーを示す.

1. ワタリアホウドリ *Diomedea exulans* (2)

1970 年 11 月に沖縄県尖閣列島周辺で捕獲さ
 れた雌雄各 1 羽の記録があるだけである (友
 利・新垣 1975). 本記録は黒田ら (1975) に記
 述されており, 亜種についても「この種には 2
 亜種が認められ, 琉球産のもの亜種名はワタ
 リアホウドリ *D. e. exulans* Linnaeus である」と
 していることから, 「亜種を同定できない」とい
 う判断に至った経緯は不明である. 黒田ら
 (1975) で「沖縄鳥類保護協会に保存」とされた
 剥製標本は現在沖縄県本部町立博物館に保管さ
 れており, 羽毛から DNA を採取する試みが行
 われていることから, 今後, 亜種 (繁殖地) の
 情報が判明する可能性がある. 7 版では亜種判
 断を留保する場合も本掲載とする. ただし, 本
 種が 4 種に分割されるという学説もあり (Onley
 & Scofield 2007 等), 分類上の扱いを確定する必
 要がある.

【標本あり】本部町立博物館

対応: A3 と判断する.

2. ハクガン *Anser caerulescens* の亜種 オオハクガン *A. c. atlanticus* (1,5)

北海道 (1994 年および 1995 年) の記録について「公表されたが最終原稿にまにあわなかった」と判断する。ただし、同誌 (同号) に掲載されたコウライクイナ (論文ではコウライヒクイナ) は 6 版に掲載されており、掲載論文の取り扱いについて整合性に欠ける状況にある。論文では「大型の亜種ハクガンである可能性」を示した上で、「国内外の鳥類研究者の同定結果にもとづき」本亜種と断じている。「ハクガンの大型個体であり、亜種オオハクガンたり得ない」とする論文は出されておらず、同亜種の存在を認める限り、本記録に基づき掲載すべきである。なお、インターネット上では本亜種と思われる記録 (北海道静内 1999 年 12 月, 秋田県小友沼 2003 年 12 月, 等) の情報があり、公表されることが望ましい。

【学術誌報告】星子 (1997)

対応: A1 と判断する。

3. インドガン *Anser indicus* (4)

6 版の時点では、1968 年 8~10 月に千葉県新浜 (新浜倶楽部 1988), 1972 年 9 月に長野県千曲川 (2 羽; 山岸・月岡 1974, 日本野鳥の会野鳥記録委員会 1989), 1984 年 4 月に広島県福山市 (高野 1989) [ただし、長野と広島それぞれの記録は日本野鳥の会長野支部 (1979), 日本野鳥の会広島支部 (2002) には掲載されていない], 1986 年 2~4 月に東京都小笠原諸島父島 (野鳥編集部 1986, 日本野鳥の会野鳥記録委員会 1986, 桐原ら 2000) での記録がある。北海道帯広市の記録 (1984 年 5 月; 高野 1989) については帯広動物園からの逸出であったとされ (千嶋 淳 私信), 動物園等で飼育されている事例も多いが、複数が観察された千曲川の記録や離島である小笠原の記録については「かご抜け」と断定することが難しい。これらの記録の他に、2006 年 10 月に沖縄県多良間島で一時滞在した 1 羽が観察・撮影されている (沖縄野鳥研究会 2010)。長距離の渡りをする種であり、離島での新たな記録となることから、自然分布と考えることが合理的である。

【刊行図書】沖縄野鳥研究会 (2010)

対応: A2 と判断する。

4. コブガモ *Sarkidiornis melanotos melanotos* (4,5)

6 版検討の時点では、1975 年 9 月 30 日および 1976 年 1 月 12 日、東京都下の記録に基づき、「飼育の可能性あり」との整理がされている (藤巻裕蔵 私信 1998 年 2 月 2 日)。本種は南アメリカとアフリカから南アジアに分布し、2 亜種に分けられるが (del Hoyo *et al.* 1992), いずれも留鳥とされ、大規模な渡りは知られていない (del Hoyo *et al.* 1992)。当該記録以外の情報もない。

対応: B3 と判断する。

5. ヨーロッパチュウヒ *Circus aeruginosus aeruginosus* (1,3,5)

1989 年 12 月に山口県で幼鳥とされる 1 羽が観察・撮影された記録があり、鶴 (1990), 森岡ら (1995) に掲載されている。同書には本種の一般的特徴と類似種との識別点が記述されており、当該個体を本種と断定できると考えられる。本記録以降の情報は得られていないが、本記録については公刊図書で明示されていると考えられる。

【刊行図書】森岡ら (1995)

対応: A2 と判断する。

6. ハヤブサの 1 亜種 *Falco peregrinus calidus* (1,3,5)

ハヤブサの亜種について、6 版では日本で繁殖するのは亜種ハヤブサ *F. p. japonensis* および亜種シマハヤブサ *F. p. furuittii* (北硫黄島で留鳥 - 絶滅危惧 I A 類) とされている。他に冬鳥として稀に渡来する亜種として、オオハヤブサ *F. p. pealei* およびシベリアハヤブサ *F. p. hartei* が掲載されている。亜種ウスハヤブサ *F. p. calidus* については福岡県 (1992 年 1 月) および鹿児島県 (1992 年 2 月) の記録 (日本野鳥の会野鳥記録委員会 1992) で「本邦初記録亜種」とされているが、同定の根拠等については記述がない。また、これに先立つ 1986 年 12 月に、鹿児島県高尾野町で本亜種と思われる個体が観察・撮影されている (森岡ら 1995)。本亜種については、野外観察のみでは亜種ツンドラハヤブサ *F. p. tundrius* との識別が難しいと思われる。また、1993 年に静岡県で亜種アメリカハヤブサ *F. p. anatum* の記録が足輪によって確認されている (静岡の鳥編集委員会 1998)。一方、留鳥とされる亜種シマハヤブサの生息状況については絶滅

の疑いがある。なお、6版にない本種の亜種名は森岡ら(1995)による。

【刊行図書】森岡ら(1995)

対応：A3と判断する(ハヤブサの各亜種について精査する必要がある)。

7. セイケイ *Porphyrio porphyrio* (2,4,5)

6版の時点では、神奈川県と和歌山県の記録があり亜種は不明、迷行もするが、東南アジアでは普通の飼育鳥のため、国内の記録については「飼育の可能性あり」との整理がされている(藤巻裕蔵 私信 1998年2月2日)。神奈川の記録については、1973年4月に川崎市中原区、1975年5月に横浜港に入った貨物船で、それぞれ衰弱した個体が保護された(日本野鳥の会神奈川支部 1980)とされており、明らかに人為による分布である。和歌山県での記録は1977年9月に美浜町和田で観察・撮影されたものである(和歌山県立日高々校生物部 1978)。1995年1月に沖縄県沖縄市でも記録されているが、この個体も「かご抜け」とされており(Birder 編集部 1997)、新たに自然分布と考えられる記録はない。

対応：B3と判断する。

8. アメリカムナグロ *Pluvialis dominica* (3,5)

1986年に沖縄県での越冬観察記録(McWhirter *et al.* 1996)の他、本州(埼玉県 1987年4月、茨城県 2002年5月)での観察・撮影記録がある。近縁種(ムナグロ)との識別が問題となるが、正式な報告が発表されている。

【学術誌報告】渡辺(2000)、渡辺(2004)

対応：A1と判断する。

9. アメリカズグロカモメ *Larus pipixcan* (5)

京都府(1984年1月；野鳥編集部 1984, 桐原ら 2000)、愛知県(1988年9月；愛知県 1995)、秋田県(1988年11月；日本野鳥の会秋田県支部 1999, 2005年8~11月；佐々木ら 2007)、神奈川県(1998年6月；西田 1998, 日本野鳥の会神奈川支部鳥類目録編集委員会 1998, 日本野鳥の会神奈川支部 2002)、大阪府(1984年4月, 2000年11月；日本野鳥の会大阪支部 2002)、沖縄県(与那国島 2006年7月；森河・森河 2008)での記録があり、写真も各書籍に掲載されている。秋田県の2例目の報告では過去の記録もまとめられている。

【学術誌報告】佐々木ら(2007)

対応：A1と判断する。

10. ヒメカモメ *Larus minutus* (1,5)

北海道(1980年8月；今井 1981)の記録については、公表された写真は本種であることを確認するには不十分なものであり、広島県(1984年8月；野鳥編集部 1985)、沖縄県(1987年6月；Brazil & Snetsinger 1991)等の記録も観察報告のみで客観的に証拠となる写真はなかった。2008年3月に千葉県で観察・撮影され、過去の記録もまとめられた(加藤ら 2009)。さらに千葉県で2010年4月(鈴木 2010)と12月(桐原政志 私信)の観察・撮影記録がある。

【学術誌報告】加藤ら(2009)

対応：A1と判断する。

11. ボナパルトカモメ *Larus philadelphia* (1)

茨城県(1985年12月)および神奈川県(1985年12月~1986年2月越冬)の記録があり、発見の記録は鳥学会誌に報告されている(今井ら 1986)。今井ら(1986)に対する否定論文はなく、神奈川県の個体は越冬したため多数撮影され、本種と識別できる写真は各書籍に掲載されている(桐原ら 2000等)ことから6版で「同定可能な写真がない」とされた経緯は不明。その後、神奈川県(1987年4月；氏原 1987, 日本野鳥の会神奈川支部 2002)、北海道(1987年5月；井上 1987)および山口県(2000年1月；秋本裕寿 私信)で観察されており、後2者については撮影されている。

【学術誌報告】今井ら(1986)

対応：A1と判断する。

12. アイスランドカモメ *Larus glaucooides* (1,3)

北海道の記録(1984年11月；Alström & Olsson 1985)に対して日本野鳥の会野鳥記録委員会(1989)で「シロカモメ(の小さい個体?)を暗示する要素が強い」として「当該の種ではない」と主張されている。その後、東京都、千葉県、茨城県で本種とされる個体の記録があり、書籍にも掲載されている(桐原ら 2000等)。本種とシロカモメおよびカナダカモメとは別種とする考えは広く認められていると考えられるが、大型カモメ類には種間交雑例があることや、本種についても基亜種および亜種 *L. g. kumlieni* とされるタイプが観察されている(桐原ら 2000)こ

とから分類上の検討が必要である。

【学術誌報告】 Alström & Olsson (1985)

【刊行図書】 桐原ら (2000)

対応：A3 と判断する。

13. ニシセグロカモメ *Larus fuscus* (1,2)

脚の黄色いセグロカモメ類（必ずしも常に黄色とは限らない）について、ヨーロッパに分布するニシセグロカモメ *L. fuscus* の亜種とするか、別の種とするのかで判断が分かれている。セグロカモメ *L. argentatus* の各亜種をセグロカモメ *L. vegae*, ホイグリンカモメ *L. heuglini*, キアシセグロカモメ（モンゴルカモメ） *L. cachinnans* 等の独立種に分ける考え方が一方、ホイグリンカモメについてはニシセグロカモメの1亜種と位置づける考え方もある。また、ホイグリンカモメについても亜種タイミルセグロカモメ *taimyrensis* を認める場合と、これを認めずに *L. vegae* と *L. heuglini* の交雑個体群とする場合がある (Olsen and Larsson 2004)。さらに独立種 *L. taimyrensis* とする主張もある (van Dijk et al. 2011)。また、セグロカモメ類の記録としては、これらとは別に、北米に分布する *L. a. smithsonianus* (ウスセグロカモメまたはアメリカセグロカモメと呼ばれることがある) の情報もある (日本野鳥の会青森県支部／弘前支部 2001)。繁殖地の個体群を種または亜種として分類できるとしても、日本で確認されるのは渡りまたは越冬個体であり、それらの表現型に近い個体を野外識別して各種および亜種に分けることが可能であるか検討が必要である。なお、6版にない亜種和名は桐原ら (2009) による。

【刊行図書】 桐原ら (2009)

対応：A3 と判断する。

14. キョクアジサシ *Sterna paradisaea* (1,3,5)

第5版でも掲載保留種であったが、その後、茨城県 (1989年7月ほか；日本野鳥の会野鳥記録委員会 1989)、千葉県 (2004年5月ほか；千葉県史料研究財団 2000, 桑原ら 2007)、神奈川県 (1988年8月；日本野鳥の会野鳥記録委員会 1989, 1994年5月；永島 1994, 日本野鳥の会神奈川支部 2002) 等で観察・撮影記録がある。静岡県 (2003年6月) の個体は落鳥し、標本は山階鳥類研究所に送付され (佐々木ら 2004)、現在仮剥製として保管されている (標本番号 YIO-63575)。なお山階鳥類研究所の標本データ

ベースによれば、この他に1996年7月13日に茨城県鹿島郡波崎町豊ヶ浜 (現神栖市) で採集された個体が標本番号 YIO-20742 として保管されている。

【学術誌報告】 佐々木ら (2004)

対応：A1 と判断する。

15. ヒメウミスズメ *Alle alle* (1,5)

沖縄県での保護・落鳥記録 (1992年1月；研究センター 1993, 日本野鳥の会野鳥記録委員会 1993) 以降、静岡県 (1996年5月；原 1996)、大分県 (2002年6月；中村ら 2003) で観察・撮影されている。また、北海道でも観察記録 (1994年3月；高田 2001) がある。

【学術誌報告】 中村ら (2003)

対応：A1 と判断する。

16. ヒメモリバト *Columba oenas* (2,4)

山形県飛鳥での観察・撮影記録 (1984年11月；真木 1985, 1992) 以降、石川県舳倉島 (1990年11月；日本野鳥の会石川支部 1998, 2000年10月22日；平野 2001)、鹿児島県出水市 (1995年12月～越冬, 2羽；五百沢ら 2000, 2003年1月；尾上和久 私信)、沖縄県金武町 (1992年11月；沖縄野鳥研究会 2002)、沖縄県与那国島 (1997年2月；大西敏一 私信)、鹿児島県奄美大島 (1993年6月；奄美野鳥の会 1997)、山口県見島 (1994年5月；日本野鳥の会野鳥記録検討会 1994)、長崎県対馬 (1992年5月；杉原 敏 私信, 1993年5月；深川正夫 私信) 等でも観察・撮影されている。真木 (1985) では基亜種と想定しているが、7版では亜種判断を留保する場合も本掲載とする。1990年代に離島での観察事例が増えており、自然分布と考えられる。

【学術誌報告】 真木 (1985)

【刊行図書】 五百沢ら (2000) ほか

対応：真木 (1985) 以外の記録について A2 と判断する。

17. ミナミメンフクロウ *Tyto capensis* (2)

1975年5月14日に沖縄県西表島で保護され、その後落鳥した個体の記録のみである (福地 1976)。亜種については、台湾産の *T. c. pithecopis* あるいは中国大陸南部産の *T. c. chinensis* とする説 (小林 1983)、または *T. c. pithecopis* あるいはフィリピンの *T. c. amauronota* とする説 (森岡ら

- 1978) が示されているが、測定値はなく、標本が残っていないため亜種の確定に至らない。7版では亜種判断を留保する場合も本掲載とする。但し、上記の亜種群は広義のミナミメンフクロウ *T. capensis* から分割されたヒガシメンフクロウ *T. longimembris* の亜種とする説が近年は一般化しており (例えば del Hoyo *et al.* 1999, Clements 2007), 学名を確定する必要がある。
- 【刊行図書】福地 (1976)
対応: A2 (A3) と判断する。
18. アオショウビン *Halcyon smyrnensis* (1,2,5)
石垣島 (1994年4月; 研究センター 1994, 日本野鳥の会野鳥記録検討会 1994), 西表島 (1998年4月; 五百沢ら 2000) および与那国島 (2000年5月; 真木・大西 2000) で観察されている。西表島の記録は鮮明な写真が書籍に掲載されている。同種には4亜種 (del Hoyo *et al.* 2001) または6亜種 (Dickinson 2003, Clements 2007) が知られており、日本で記録されている個体は東南アジアから台湾にかけて分布する *H. s. fusca* (del Hoyo *et al.* 2001) あるいは *H. s. fokiensis* (Dickinson 2003, Clements 2007) の可能性が高いと判断されるが、7版では亜種判断を留保する場合も本掲載とする。
- 【刊行図書】五百沢ら (2000)
対応: A2 と判断する。
19. ヨーロッパコマドリ *Erithacus rubecula* (2,4,5)
北海道 (音更町 2003年12月; 森岡・Birder 編集部 2004, 忠類村 2004年2月; 初野・森岡 2004, 札幌市豊平区 2004年4月; 石狩鳥類研究会 2005, 浦幌町 2005年1月~2月; 久保・佐藤 2010), 山形県飛鳥 (1995年5月; 佐々木・佐々木 1999, 1998年5月; Birder 編集部 1998), 千葉県 (1990年11月; 亀谷 1991), 奈良県大台ヶ原 (1993年5月; Birder 編集部 1993, 真木・大西 2000), 石川県舳倉島 (2009年4月; 平野 2010) で観察、撮影されている。7版では亜種判断を留保する場合も本掲載とする。亀谷 (1991) は野生個体としており、佐々木・佐々木 (1999) では、自然分布と結論づけていないが飼育個体に見られる兆候はなかったとしている。また平野 (2010) では「とりあえずはカゴ抜け扱いとする」とされている。日本産鳥類記録リスト (3) (川路ら 2003) 以降も観察事例が続いており、自然分布の拡大と考えられる。
- 【学術誌報告】佐々木・佐々木 (1999), 久保・佐藤 (2010)
対応: A1 と判断する。
20. コシジロイソヒヨドリ *Monticola saxatilis* (1,4)
1982年5月の静岡県の記録が唯一である (川路ら 2002)。川田 (1982a) にモノクロ写真が掲載され、川田 (1982b) には写真は掲載されていないが、写真図鑑類には同個体のカラー写真が掲載されているものがあり (五百沢ら 2000), 同定は可能である。しかしながら、自然分布への疑問については、本個体以降の記録がなく、新たな知見が得られていないことから、留保せざるを得ない。
- 【学術誌報告】川田 (1982)
対応: C と判断する。
21. ウタツグミ *Turdus philomelos* (2,3,4)
川路ら (2003) によれば、神奈川県 (1987年11月; 五百沢ら 2000), 埼玉県 (1991年10月), 大阪府 (1995年4月), 広島県 (1997年10月) の記録があるが、埼玉県の落鳥個体および大阪府の撮影個体についてはクロツグミの雌と考えられており、本種と判定できる記録は神奈川県の記録のみであった。このほかに、新潟県において新潟市 (1996年10月; 日本野鳥の会新潟県支部 1997) および上越市 (2006年10月30日; 渡辺 央 私信) の記録があるとされるが詳細は不明である。その後、2006年11月に東京都葛西臨海公園で観察・撮影されている (日本野鳥の会東京支部研究部 2007)。複数の観察事例があるが、確実に撮影されているのは都会周辺であり、自然分布への疑問は解消されたと言えない。また、離島での記録がある可能性はあるが確認できない。
- 【刊行図書】五百沢ら (2000)
対応: C と判断する。
22. ヤドリギツグミ *Turdus viscivorus* (5)
愛知県 (1984年2~3月), 石川県舳倉島 (1993年11月, 1999年10月), 山形県飛鳥 (1996年5月), 福岡県相島 (1998年11月) の記録があるとされ (川路ら 2003), 愛知県の個体は写真図鑑に掲載されている (五百沢ら 2000)。
- 【学術誌報告】平野・尾崎 (2002), Brazil (2003)
対応: A1 と判断する。

23. コノドジロムシクイ *Sylvia curruca* (5)

1994年10月、北海道函館市での捕獲の記録(和田・佐藤1998)が最初のものであるが、その後山形県(1998年2月)、北海道根室市(2002年12月~2003年1月および2007年12月)、愛知県(2003年2~3月)、高知県(2007年4月)、鹿児島県奄美大島(2007年4月)、三重県(2007年11月)、東京都(2008年1~2月)、石川県舩倉島(2008年5月)の記録があり、渡部・池長(2010)により取りまとめられている。その後、石川県舩倉島(2009年9月25~28日、2羽; David Cooper 私信)、山形県飛鳥(2009年10月; 日本野鳥の会山形県支部2009、桐原政志私信)、東京都神津島(2009年11月; 天野洋祐私信)等観察事例が増えている。

【学術誌報告】和田・佐藤(1998)、渡部・池長(2010)

対応: A1 と判断する。

24. イナダヨシキリ *Acrocephalus agricola* (1,2,5)

1992年5月に石川県舩倉島での記録がある。その後、本種とされる記録(京都府1996年4月および石川県舩倉島2003年6月)もあるが日本産鳥類記録委員会(2005)に整理されているように、写真もなく、証明できない。1992年の個体については写真図鑑にも掲載されているが(五百沢ら2000)、日本野鳥の会野鳥記録委員会(1992)には、「亜種の識別ができないが、*tangorum* を本種の一亜種とする説(山階1986)をとって、この個体をイナダヨシキリと認める。本邦初記録」との記述があり、*tangorum* との識別を留保している。近年の文献では、*A. agricola* の亜種については、単形種(Clements 2007)、2亜種(Dickinson 2003, Kennerley & Pearson 2010)および3亜種(del Hoyo *et al.* 2006)とする諸説があるが、いずれも*tangorum* を別種としている。また、*tangorum* についても単形種とする場合(Dickinson 2003, del Hoyo *et al.* 2006, Kennerley & Pearson 2010)とコヨシキリ *A. bistrigiceps* の1亜種とする説(Clements 2007)がある。狭義の *A. agricola* (*tangorum* を含めない)は中央アジアに分布する種であるが、移動性があることから、日本に迷行する可能性は否定できない。また、宮城県で2005年11月(大崎市; 山階鳥類研究所2006, 2009)と2010年10月24日(東松島市; 竹丸勝朗私信)に標識放鳥されており、正式な報告が待たれる。7版では亜種

判断を留保する場合も本掲載となるが、*tangorum* との関係を含め、種の扱いについて分類上の整理が必要である。

【刊行図書】五百沢ら(2000)

対応: A3 と判断する。

25. オジロビタキ *Ficedula parva* の基亜種 *F. p. parva* (3,5)

オジロビタキの雄個体で喉のオレンジ色の部分が胸まで達している個体が観察されており、本亜種(真木・大西(2000)では和名をニシオジロビタキとしている)の可能性が考えられる(鹿児島県1998年2月; 五百沢ら2000, 2006年12月; 池長未発表等)。森岡(1998)では各地で撮影されたオジロビタキの亜種判別を試みており、大西(2011)は「10月中旬以降に見られるものはほとんどニシ」としている。また、本種については del Hoyo *et al.* (2006) 等では2亜種としているが、東西の各亜種を独立種とする見解もあり(茂田2008)、対応が必要となる。また、本亜種の記録を整理した報告が求められる。

【刊行図書】五百沢ら(2000)

対応: A3 と判断する。

26. ミヤマヒタキ *Muscicapa ferruginea* (5)

1971年5月の男女群島での記録が最初のものであるが、「台湾で留鳥」等として、第5版でも掲載保留種であった。その後、沖縄県与那国島(2回)と鹿児島県トカラ列島平島(3回)の記録がある(日本産鳥類記録委員会2004)ほか、山口県見島(2004年5月; 武下2004, 2010年5月; 見島観光協会バードウォッチング係2010)、愛知県名古屋市(2007年5月; 西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会2008)、沖縄県沖縄本島(2008年3月; 沖縄野鳥研究会2010)、沖縄県宮古島(2008年10月; 沖縄野鳥研究会2010)等の各地で記録されている。琉球列島や日本海側の離島等で渡りの時期に観察されており、五百沢ら(2000)等にも写真掲載されている。

【刊行図書】五百沢ら(2000)

対応: A2 と判断する。

27. ダルマエナガ *Paradoxornis webbianus* (4)

1984年5月に新潟県粟島で標識調査の際に捕獲され、保護後落鳥した記録が唯一である(風

- 間 1984). ロシア極東からベトナム北部, 台湾まで6~9 亜種が広く分布するが (del Hoyo *et al.* 2007, Dickinson 2003), 飛翔力が弱いとされ, 季節移動はほとんど知られていない (del Hoyo *et al.* 2007). 自然分布への疑問については, 本個体以降の記録が無く, 留保せざるを得ない.
【学術誌報告】 風間 (1984)
対応: C と判断する.
28. チョウセンメジロ *Zosterops erythropleurus* (4,5)
1974年11月, 1981年10月, 1982年9月に福井県織田町笈松の織田山鳥類観測ステーションで標識放鳥されている (林 1975, 安部ら 1976, 福井県自然環境保全調査研究会 1999). その後, 山形県飛鳥 (1999年10月; 山形新聞社 2011 ほか), 石川県舳倉島 (1997年10月; 五百沢ら 2000 ほか), 沖縄県与那国島 (2004年11月; 宇山 2011) 等で記録があり, 同定可能な写真が写真図鑑に多数掲載されている. 主に秋の渡りの時期に定例的な観察事例があり, 自然分布と考えられる.
【学術誌報告】 安部ら (1976)
【刊行図書】 五百沢ら (2000) ほか
対応: 新たな記録に対し, A2 と判断する.
29. サバンナシトド *Ammodramus sandwichensis* (5)
1971年1月に宮城県伊豆沼で観察され, 同3月に茨城県酒沼で観察・撮影されたのが最初の記録であるが, 第5版でも掲載保留種であった. さらに, 1977年11月に鹿児島県出水, 1980年10月に青森県六ヶ所村でそれぞれ標識放鳥されているが, 正式記録になっていなかった. 永田・石本 (2000) により1998年4月に茨城県桜川村 (現稲敷市) で捕獲された個体について学術論文が書かれ, それ以前の記録 (千葉県 1981年3月および1985年1月, 沖縄県 1985年12月, 鹿児島県 1988年1月, 香川県 1988年3月, 新潟県 1991年10月, 埼玉県 1991年11月および1998年3月, 石川県舳倉島 1994年4月, 茨城県 1996年2月, 2羽) についても取りまとめられているほか, 愛知県 (1993年4月; 愛知県) でも記録されている. その後, 高知県 (2003年10月; 高橋 2003, 2007年11月; 日本野鳥の会高知支部 2008), 東京都 (2003年11月; 東 2004, 島崎 2004, 野鳥記録委員会 2010b), 北海道 (2004年2~3月; 山本 2005), 長崎県 (2005年12月11日; 宮本恵子 私信), 岩手県 (2009年2月; 藤井ら 2010) 等の記録がある.
【学術誌報告】 永田・石本 (2000), 山本 (2005), 藤井ら (2010)
対応: A1 と判断する.
30. チャキンチョウ *Emberiza bruniceps* (4,5)
1995年5月に山形県飛鳥で観察・撮影され写真図鑑に掲載されている (五百沢ら 2000) ほか, 沖縄県与那国島 (2004年5月, 2005年10~11月; 宇山 2011), 長崎県対馬 (2006年1月; 杉原 敏 私信) の記録がある. また, 平野 (2005) は, 石川県舳倉島における1976年4月, 5月および1977年5月の記録について自然分布の可能性があると判断しており, 以降, 2005年9~10月 (平野 2006), 2006年10月 (平野 2007), 2008年9月 (平野 2009), 2009年10月 (平野 2010) に記録がある. 一方, ペットとして飼養されている事例があることから, 大都市周辺ではその逸出もあると考えられ, 東京都小平市の記録 (2001年12月; 日本野鳥の会東京支部研究部 2010b) では「籠抜けの可能性も否定できません」とされている. また, 本種は若鳥ではズグロチャキンチョウとの野外識別が難しいことから, 本種と確実に判定できる観察例は多くない. 離島での観察事例が増えており, 既知の分布域の比較からズグロチャキンチョウを自然分布とするなら本種も同様とすべきと考える.
【刊行図書】 五百沢ら (2000) ほか
対応: A2 と判断する.
31. ウィルソンアメリカムシクイ *Wilsonia pusilla* (1,2,5)
1991年10月に石川県舳倉島で観察・撮影されている記録が唯一である (文屋 1992). カラー写真が写真図鑑に掲載されており, 他に類種の種がないことから本種の同定に問題があるとは思えない. 3亜種が知られており (Dickinson 2003, Clements 2007, del Hoyo *et al.* 2010), 分布域からは *W. p. pileolata* である可能性が高いと思われるが (Dunn & Garrett 1997), 7版では亜種判断を留保する場合も本掲載とする.
【刊行図書】 五百沢ら (2000) ほか
対応: A2 と判断する.

32. ゴシキヒワ *Carduelis carduelis* (2,4,5)

山形県飛鳥 (1996年5月; Birder 編集部 1996), 石川県舳倉島 (1996年5月; 森岡 1998), 新潟県粟島 (2001年4月; 柳澤・柳澤 2008), 東京都伊豆大島 (2009年3月; 天野洋祐 私信) 等の離島の記録があるが, ペットとして飼養されている事例も多い。国内での記録には *carduelis* グループと *caniceps* グループがあるとされ, 前者は飼育事例の多いヨーロッパの亜種グループであるが, 後者はそれに比べて地味で, より東に分布していることから自然分布の可能性も考えられる。五百沢ら (2000) は, 両グループとも輸入されていることから「飼い鳥として輸入されたものが逃げ出した可能性もある」としている。

【刊行図書】五百沢ら (2000) ほか

対応: C と判断する。

33. バライロムクドリ *Sturnus roseus* (5)

1977年10月に石川県舳倉島で幼鳥が観察・撮影されているが (日本野鳥の会 1988), 「幼鳥と雌は特徴が少なく識別が難しい」とされ, 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1989) では「公式記録」から除外されている。沖縄県, 島根県, 鹿児島県および高知県の記録について佐藤ら (2010) によって取りまとめられているほか, 東京都 (江戸川区 1994年11月; 野鳥記録委員会 2010a, 小笠原村母島 2010年7月; 日本野鳥の会東京支部研究部 2010a) でも記録があり, 近年は越冬記録も増加している。

【学術誌報告】所崎ら (2002), 佐藤ら (2010)

対応: A1 と判断する。

34. ハイイロオウチュウ *Dicrurus leucophaeus* (2,4,5)

第6版編集委員会では, 1997年2月28日の沖縄県西表島の記録 (二階堂善滋氏の撮影) について, 同定を確認し, 亜種不明, 論文公表なしとして検討中とした (藤巻裕蔵 私信)。この記録のほか, 本州 (静岡県 2002年11月; 静岡の鳥編集委員会 2010, 愛知県 2006年10月; 西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会 2010), 四国 (観察情報のみ, 愛媛県高茂岬 2009年10月; 楠木憲一 私信), 九州 (熊本県益城町飯田山麓 1997年10月~1998年1月; 向井榮子 私信, 長崎市野母崎 2010年5月; 老松 2010), 対馬 (2011年5月; 貞光隆志 私信), 鹿児島県ト

カラ列島平島 (2006年5月, 2011年5月; 所崎聡 私信), 奄美大島 (2002年11月; 奄美野鳥の会 2009), 沖縄県沖縄本島 (1998年9月; 髙原ら 2000), 粟国島 (1998年10月2羽; 髙原ら 2000), 座間味島 (2011年3月; 髙原建二 私信), 伊良部島 (2010年10月; 砂川 2011), 石垣島 (1998年3月; 五百沢ら 2000), 西表島 (2002年11月; 五百沢ら 2004, 2005年3月), 与那国島 (1996年9月, 1997年10月; 髙原ら 2000, 2004年9月, 10月, 2005年10月; 宇山 2011 他) 等の記録があり, 写真図鑑にも掲載されている。多数の亜種があるとされているが, 髙原ら (2000) は森岡 (1999) を踏まえ *D. l. leucogenis* としている。また, 亜種を留保する場合も本掲載とする。春と秋の渡りの時期に観察事例が増えており, 自然分布と考えられる。

【刊行図書】五百沢ら (2000), 髙原ら (2000)

対応: A2 と判断する。

上記の各種の記録および文献の確認にあたり, 各地域の鳥類記録取りまとめ担当の方から情報をいただいたほか, 秋本裕寿, 天野洋祐, 千嶋 淳, David Cooper, 深川正夫, 桐原政志, 楠木憲一, 宮本恵子, 向井榮子, 尾上和久, 大西敏一, 貞光隆志, 杉原 敏, 所崎 聡の各氏からも情報をいただいた。また, 日本産鳥類記録委員会の梶田 学委員長と亀谷辰朗副委員長から多大な情報提供と重要なコメントをいただいた。記して感謝の意を表する。

引用文献

- 無記名 (1988) 日本に舞い降りた野鳥たち。野鳥 53(4): 10-21.
- 無記名 (2009) 庄内に現れた珍客。やませみ (74): 3.
- 安部直哉・黒沢 収・真野 徹 (1976) 日本初記録 *Zosterops erythropleura* について。山階鳥研報 8: 95-100.
- 愛知県 (1996) 愛知の野鳥 1995。愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋。
- Alström P & Olsson U (1985) First Record of Iceland Gull *Larus glaucooides* from Japan. Strix 4: 70-72.
- 奄美野鳥の会 (編) (1997) 図鑑 奄美の野鳥。奄美野鳥の会, 名瀬。
- 奄美野鳥の会 (編) (2009) 奄美の野鳥図鑑。文一総合出版, 東京。
- Birder 編集部 (1993) 最近何か出てますか?—野鳥情報ネットワーク。Birder 7(7): 68-69.
- Birder 編集部 (1996) 最近何か出てますか?—野鳥情報ネットワーク。Birder 10(7): 88-93.
- Birder 編集部 (1997) かが抜け鳥の世界。Birder 11(3): 10-26.
- Birder 編集部 (1998) 最近何か出てますか?—野鳥情報ネットワーク。Birder 12(7): 84-89.
- Brazil MA (2003) Mistle Thrush *Turdus viscivorus*: New for

- Japan. J. Yamashina. Inst. Ornithol. **34**: 320–324.
- Brazil MA & Snetsinger P (1991) The Little Gull *Larus minutus* in Japan. J. Yamashina. Inst. Ornithol. **22**: 80–82.
- 文屋 誠 (1992) ウィルソンアメリカムシクイと出会う. *Birder* **6**(2): 18.
- 千葉県史料研究財団 (編) (2000) 千葉県の自然誌 本編 7 千葉県の動物 2 海の動物. 千葉県, 千葉.
- Clements JF (2007) *The Clements Checklist of Birds of the World. 6th ed.*, Cornell University Press, New York.
- del Hoyo J, Elliott A & Sargatal J (eds.) (1992) *Handbook of the birds of the world. Vol. 1. Ostrich to Ducks*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Sargatal J (eds.) (1999) *Handbook of the birds of the world. Vol. 5. Barn-owls to Hummingbirds*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Sargatal J (eds.) (2001) *Handbook of the birds of the world. Vol. 6. Mousebirds to Hornbills*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie D (eds.) (2006) *Handbook of the birds of the world. Vol. 11. Old World Flycatchers to Old World Warblers*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie D (eds.) (2007) *Handbook of the birds of the world. Vol. 12. Picathartes to Tits and Chickadees*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J, Elliott A & Christie D (eds.) (2010) *Handbook of the birds of the world. Vol. 15. Weavers to New World Warblers*. Lynx Edicions, Barcelona.
- Dickinson EC (ed.) (2003) *The Howard and Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 3rd ed.*, Christopher Helm, London.
- Dunn JL & Garrett KL (1997) *A Field Guide to Warblers of North America*. Houghton Mifflin Company, New York.
- 藤井忠志・佐々木 均・佐々木あさ子・工藤浩一・四ツ家孝司 (2010) サバンナシトド *Passerculus sandwichensis* の岩手県初記録. 日鳥学誌 **59**: 69–72.
- 福地利供 (1976) ミナミメンフクロウとオウチュウの発見記. 野鳥 **41**(12): 18–19.
- 福井県自然環境保全調査研究会 (監) (1999) 福井県のすぐれた自然 動物編. 福井県県民生活部自然保護課, 福井.
- 原 徹 (1996) 奥駿河湾におけるヒメウミスズメの観察. *Birder* **10**(8): 62–63.
- 初野 謙・森岡照明 (2004) 2003 年 6 月～2004 年 3 月国内で観察された珍鳥・迷鳥図鑑. *Birder* **18**(6): 38–44.
- 林 武雄 (1975) 織田鳥類観測ステーションにおける標識調査結果. 福井市立郷土自然科学博物館博物同好会会報 (22): 3–6.
- 平野賢次 (編) (2001) 石川野鳥年鑑 2000. 日本野鳥の会 石川支部, 金沢.
- 平野賢次 (編) (2005) 石川野鳥年鑑 2004. 日本野鳥の会 石川支部, 金沢.
- 平野賢次 (編) (2006) 石川野鳥年鑑 2005. 日本野鳥の会 石川支部, 金沢.
- 平野賢次 (編) (2007) 石川野鳥年鑑 2006. 日本野鳥の会 石川支部, 金沢.
- 平野賢次 (編) (2009) 石川野鳥年鑑 2008. 日本野鳥の会 石川支部, 金沢.
- 平野賢次 (編) (2010) 石川野鳥年鑑 2009. 日本野鳥の会 石川, 金沢.
- 平野賢次・尾崎雄二 (2002) 石川県におけるヤドリギツグミの初記録. *Strix* **20**: 179–180.
- 星子廉彰 (1997) 日本におけるオオハクガン *Anser caerulescens atlanticus* の初記録. 山階鳥研報 **29**: 108–110.
- 今井光雄 (1981) ヒメカモメ観察記—北海道落石岬にて—. 野鳥 **46**(7): 30–31.
- 今井光雄・小沢重雄・榛葉忠雄 (1986) Bonaparte's Gull *Larus philadelphia* の渡来. 日鳥学誌 **35**: 33.
- 井上公雄 (1987) 珍鳥ニュース. 北海道野鳥だより (69): 12–13.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸 (2000) 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸 (2004) 日本の鳥 550 山野の鳥 増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 石狩鳥類研究会 (2005) 石狩鳥報 2004. 石狩鳥類研究会, 札幌.
- 鶴 いしい (1990) 枯野の猛禽 阿知須干拓. いしい T・I アート, 広島.
- 亀谷辰朗 (1991) ヨーロッパコマドリの標識放鳥. 日本の生物 **5**(2): 37.
- 加藤大貴・加藤禎人・池長裕史 (2009) 千葉県三番瀬におけるヒメカモメ *Larus minutus* の観察記録. 日鳥学誌 **58**: 108–111.
- 川田 隆 (1982a) コシジロイソヒヨ 本邦初記録!!. 野鳥 **47**(10): 4.
- 川田 隆 (1982b) コシジロイソヒヨの日本初記録について. *Strix* **1**: 122–123.
- 川路則友・平岡 考・梶田 学・浦野栄一郎・柳沢紀夫・西海 功・金井 裕・池長裕史・亀谷辰朗 (日本産鳥類記録委員会) (2002) 日本産鳥類記録リスト (1). 日鳥学誌 **51**: 134–137. [コシジロイソヒヨドリ]
- 川路則友・平岡 考・梶田 学・浦野栄一郎・柳沢紀夫・西海 功・金井 裕・池長裕史・亀谷辰朗 (日本産鳥類記録委員会) (2003) 日本産鳥類記録リスト (2). 日鳥学誌 **52**: 44–51. [ウタツグミ, ヤドリギツグミ]
- 川路則友・平岡 考・池長裕史・梶田 学・亀谷辰朗・金井 裕・西海 功・柳沢紀夫 (日本産鳥類記録委員会) (2003) 日本産鳥類記録リスト (3). 日鳥学誌 **52**: 126–135. [ヨーロッパコマドリ]
- 川路則友・迫 静男・高良武信 (1987) トカラ列島平島における春期の鳥相. 日鳥学誌 **36**: 47–54.
- 風間辰夫 (1984) ダルマエナガ日本へ迷行. 鳥 **33**: 77–78.
- 研究センター (1993) フィールドノート. 野鳥 **58**(1): 48.
- 研究センター (1994) フィールドノート. 野鳥 **59**(10): 50.
- Kennerley P & Pearson D (2010) *Reed and Bush Warblers*. Christopher Helm, London.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2000) 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2009) 日本の鳥 550 水辺の鳥 増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 小林桂助 (1983) 原色日本鳥類図鑑 新訂増補版. 保育社, 大阪.
- 久保清司・佐藤 満 (2010) 北海道東部におけるヨーロッパコマドリ *Erithacus rubecula* の観察例. 山階鳥学誌 **41**: 212–213.

- 黒田長久・森岡弘之・高野伸二 (1975) 日本鳥類目録 (1974) 補遺 (第1回). 鳥 **24**: 61-62.
- 桑原和之・奴賀俊光・箕輪義隆・高木 武 (2007) 飯岡海岸の鳥類相, 2000-2004年. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 **15**(3): 1-23.
- 真木広造 (1985) ヒメモリバト *Columba oenas* の渡来. 鳥 **34**: 17-18.
- 真木広造 (1992) ヒメモリバト観察記. *Birder* **6**(2): 14-15.
- 真木広造・大西敏一 (2000) 日本の野鳥 590. 平凡社, 東京.
- McWhirter DW, Ikenaga H, Iozawa H, Shoyama M & Takehara K (1996) A check-list of the birds of Okinawa prefecture with notes on recent status including hypothetical records. *Bulletin of the Okinawa Prefectural Museum* **22**: 33-152.
- 見鳥観光協会バードウォッチング係 (編) (2010) 2010 春見鳥の鳥. 見鳥観光協会バードウォッチング係, 萩.
- 森河貴子・森河隆史 (2008) 与那国の野鳥を訪ねて. 個人出版.
- 森岡弘之・高野伸二・黒田長久 (1978) 日本鳥類目録 (1974) 補遺 (第2回). 鳥 **27**: 113-117.
- 森岡照明 (1998) 新しい識別の試み 11 舢倉島のゴシキヒワ. *Birder* **12**(3): 62-65, 97.
- 森岡照明 (1998) 新しい識別の試み 17 オジロビタキ. *Birder* **12**(9): 70-73, 104.
- 森岡照明 (1999) 新しい識別の試み 31 与那国島のハイロオウチュウ. *Birder* **13**(11): 62-65, 105.
- 森岡照明・Birder編集部 (2004) 珍鳥・迷鳥 SPOT MAPPING. *Birder* **18**(6): 30-31.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男 (1995) 図鑑 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- 永嶋省吾 (1994) 横須賀市長井漁港にて. はばたき (268): 9.
- 永田尚志・石本あゆみ (2000) 茨城県におけるサバンナシトド *Passerculus sandwichensis* の捕獲記録. 日鳥学誌 **49**: 55-58.
- 中村 豊・高野橋 豊・麻生 瞭・高野橋登志子・首藤直美・佐藤小百合・下川五三子 (2003) 国内におけるヒメウミスズメの記録. 日鳥学誌 **52**: 122-123.
- 日本鳥学会 (1974) 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京.
- 日本鳥類目録編集委員会 (2000) 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本産鳥類記録委員会 (2004) 日本産鳥類記録リスト (4). 日鳥学誌 **53**: 110-119. [ダルマエナガ, ミヤマヒタキ, ウィルソンアメリカムシクイ]
- 日本産鳥類記録委員会 (2005) 日本産鳥類記録リスト (5). 日鳥学誌 **54**: 60-66. [イナダヨシキリ]
- 日本産鳥類記録委員会 (2005) 日本産鳥類記録リスト (6). 日鳥学誌 **54**: 110-122. [コノドジロムシクイ]
- 日本野鳥の会秋田県支部 (1999) 秋田県産鳥類目録. 探鳥あきた (41): 55-109.
- 日本野鳥の会青森県支部/弘前支部 (2001) 青森の野鳥. 東奥日報社, 青森.
- 日本野鳥の会神奈川支部 (編) (1980) 神奈川の野鳥. 有隣堂, 横浜.
- 日本野鳥の会神奈川支部 (2002) 20世紀神奈川の鳥—神奈川県鳥類目録 IV—. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.
- 日本野鳥の会神奈川支部鳥類目録編集委員会 (1998) 神奈川県内における鳥類の写真記録—県内における希少な鳥類—. *Binos* **5**: 91-95.
- 日本野鳥の会高知支部 (2008) 野鳥情報. しるぺん (254): 3-4.
- 日本野鳥の会広島県支部 (編著) (2002) ひろしま野鳥図鑑 増補改訂版. 中国新聞社, 広島.
- 日本野鳥の会石川支部 (編) (1998) 石川の自然環境シリーズ 石川県の鳥類. 石川県環境安全部自然保護課, 金沢.
- 日本野鳥の会長野支部 (編著) (1979) 長野県鳥類目録—1972~1978年の記録—. 日本野鳥の会長野支部, 長野.
- 日本野鳥の会 新潟県支部 (編) (1997) 新潟県探鳥地雪国の鳥を訪ねて. 新潟日報事業社, 新潟.
- 日本野鳥の会大阪支部 (2002) 大阪府鳥類目録 2001. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- 日本野鳥の会東京支部研究部 (2007) 研究部レポート ウタツグミとキマユムシクイ, ヤマシヨウビンの観察記録. ユリカモメ (622): 16-18.
- 日本野鳥の会東京支部研究部 (2010a) 研究部レポート 新しい東京都産の鳥の記録・2. ユリカモメ (659): 13-14.
- 日本野鳥の会東京支部研究部 (2010b) 研究部レポート 新しい東京都産の鳥の記録・3. ユリカモメ (661): 19, 裏表紙.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1986) 野鳥情報・観察記録 1984.9—1986.7. *Strix* **5**: 89-98.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1989) 日本初記録の野鳥. 野鳥 **54**(1): 38-43.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1989) 野鳥情報 1989.1—1989.8. *Strix* **8**: 347-349.
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会 (1992) 野鳥情報・観察記録 1991.8—1992.7. *Strix* **11**: 377-382.
- 日本野鳥の会野鳥記録検討会 (1993) 野鳥情報・観察記録 1992.8—1993.6. *Strix* **12**: 259-264.
- 日本野鳥の会野鳥記録検討会 (1994) 野鳥情報・観察記録 1993.7—1994.7. *Strix* **13**: 265-274.
- 西田トミ子 (1998) 神奈川県初記録のアメリカズグロカモメ. はばたき (318): 7.
- 西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会 (2008) 愛知県内における鳥類の観察記録 2. 西三河野鳥の会研究年報 **11**: 44-47.
- 西三河野鳥の会愛知県鳥類目録検討委員会 (2010) 愛知県内における鳥類の観察記録 3. 西三河野鳥の会研究年報 **13**: 28-36.
- 老松涼一 (2010) 迷鳥のハイロオウチュウが… 長崎県野鳥の会会報 野鳥だより (286): 7-8.
- 沖縄野鳥研究会 (編) (2002) 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.
- 沖縄野鳥研究会 (編) (2010) 沖縄の野鳥 改訂版. 新星出版, 那覇.
- Olsen KM & Larsson H (2004) *Gulls of Europe, Asia and North America*. Princeton University Press, Princeton.
- 大西敏一 (2011) オジロビタキの謎〜ヒガシとニシ, 多

- いのはどっち? . Birder 25(6): 50.
- Onley D & Scofield P (2007) *Albatrosses, Petrels and Shearwaters of the World*. Princeton University Press, Princeton.
- 佐々木 均・佐々木あさ子 (1999) 山形県酒田市飛鳥におけるヨーロッパコマドリの観察. *Strix* 17: 205–208.
- 佐々木 均・佐々木あさ子・浜谷武雄・浜谷まり子・杉本明日子 (2007) 秋田県におけるアメリカズグロカモメの観察記録. *Strix* 25: 175–183.
- 佐々木裕子・中野栄明・中根敏雄・小泉金次・二木 務 (2004) 静岡県富士川河口のキョクアジサシ. *Strix* 22: 215–220.
- 佐藤重穂・高橋 徹・小林靖英・橋田晃浩 (2010) 高知市におけるパライロムクドリの越冬事例. *Bird Research* 6: S1–S6.
- 茂田良光 (2008) オジロビタキの分類, 最新情報!. *Birder* 22(5): 48, 98.
- 島崎文男 (2004) 表紙のことば 可愛かったサバンナシトド. ユリカモメ (579): 2.
- 新浜倶楽部 (1988) 新浜の鳥 (1966年～1968年の記録). 新浜倶楽部, 東京.
- 静岡の鳥編集委員会 (1998) 静岡県の鳥類. 静岡県環境部自然保護課 静岡の鳥編集委員会, 静岡.
- 静岡の鳥編集委員会 (編著) (2010) 静岡県の鳥類 第2版. 静岡の鳥編集委員会, 静岡.
- 砂川栄喜 (2011) 沖縄宮古の野鳥 亜熱帯の水辺、山野の鳥. ボーダーインク, 那覇.
- 鈴木 功 (2010) ヒメカモメ *Larus minutus* 発見記. *Birder* 24(8): 46–47.
- 高田令子 (2001) 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要 (15): 95–114.
- 高橋 徹 (2003) サバンナシトド (クサチヒメドリ). しろぺん (205): 1.
- 高野伸二 (1989) フィールドガイド日本の野鳥 増補版. 日本野鳥の会, 東京.
- 高原建二・池長裕史・金城道男・渡久地 豊・金城輝雄・庄山 守 (2000) 沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び博物館収蔵標本等により確認された興味深い鳥類の記録について—「沖縄産鳥類目録」補遺一. 沖縄県立博物館紀要 (26): 27–46.
- 武下雅文 (2004) 見鳥の初記録ミヤマヒタキ. 山口野鳥 (37): 3–4.
- 所崎 聡 (2000) 鹿児島県におけるミヤマヒタキの観察記録. *Birder* 14(11): 66.
- 所崎 聡・所崎香織・砂川栄喜 (2002) 沖縄県におけるパライロムクドリ *Sturnus roseus* の初記録. 日鳥学誌 51: 122–124.
- 友利哲夫・新垣秀雄 (1975) カラー百科シリーズ②沖縄の自然 野鳥. 新星図書, 那覇.
- 氏原巨雄 (1987) フィールドノート ボナバルトカモメ. はばたき (184): 11.
- 宇山大樹 (2011) 野鳥の記録 与那国島 2002年3月～2007年1月の678日間の観察記録. 文一総合出版, 東京.
- van Dijk K, Kharitonov S, Vonk H & Ebbinge B (2011) Taimyr Gulls: evidence for Pacific winter range, with notes on morphology and breeding. *Dutch Birding* 33(1): 9–21.
- 和歌山県立日高々校生物部 (1978) 和歌山県鳥類目録 1978年版. 和歌山県立日高高校, 御坊.
- 和田祥司・佐藤理夫 (1998) 日本初記録コノドジロムシクイについて. 日本鳥類標識協会誌 13(1): 8–10.
- 渡部良樹・池長裕史 (2010) 東京都水元公園におけるコノドジロムシクイ *Sylvia curruca* の記録. 日鳥学誌 59: 84–87.
- 渡辺朝一 (2000) アメリカムナグロ *Pluvialis dominica* の本州への初渡来記録. 山階鳥研報 32: 34–36.
- 渡辺朝一 (2004) 茨城県霞ヶ浦におけるアメリカムナグロの観察記録. *Strix* 22: 227–229.
- 野鳥編集部 (1984) 日本初記録—古都に飛来 フランクリンカモメ. 野鳥 49(5): 1.
- 野鳥編集部 (1985) フィールドノート 野鳥情報観察記録. 野鳥 50(4): 34–35.
- 野鳥編集部 (1986) フィールドノート 野鳥情報観察記録. 野鳥 51(6): 38–39.
- 野鳥記録委員会 (2010a) 新しい東京都産の鳥の記録・1. ユリカモメ (658): 14–15, 裏表紙.
- 野鳥記録委員会 (2010b) 研究部レポート 東京の『鳥類目録』をつくろう (18) 『東京都産鳥類目録 2000・自治体編・Ver.1』の検討・2 珍鳥記録の検証—1975年以降、記録が2回以下の鳥—検証結果その1・東京都産鳥類に認定した鳥. ユリカモメ (660): 14–15, 裏表紙.
- 山形新聞社 (編) (2011) やまがた野鳥図鑑. 山形新聞社, 山形.
- 山岸 哲・月岡磯雄 (1974) 信州・千曲川にインドガン 2羽. 野鳥 39(9): 43–44, 口絵.
- 山本友紀 (2005) 北海道におけるサバンナシトドの初記録. *Strix* 23: 189–191.
- 山階鳥類研究所 (2006) 平成17年度 鳥類標識調査報告書 (鳥類観測ステーション運営). 山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階鳥類研究所 (2009) 平成20年度 鳥類標識調査報告書 (鳥類観測ステーション運営). 山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階芳麿 (1986) 世界鳥類和名辞典. 大学書林, 東京.
- 柳澤紀夫・柳澤秋介 (2008) ゴシキヒワを発見. 野鳥新湯 (142): 9–10.